Essay 01

渡部耿贇画伯に表紙絵を依頼して

東京女子医科大学 名誉教授、日暮里健診プラザ 院長
小川 健治

渡部耿贇画伯に W'Waves の表紙絵を依頼して 10 年になります。画伯は 1946 年広島生まれ、私と同郷で高校（広島県立皆実高等学校、10 年前に全国高校サッカー選手権で優勝して知名度が上がりました）の１年先輩です。当時から美術部に所属し、将来は画家……と夢を抱いていたようです。その夢を叶えるべく 1977 年 30 歳で渡仏、美術学校エコール・デ・ボザール・ド・サントアンに学びました。現在はフランス芸術家協会の会員として、宮殿で有名なヴェルサイユにアトリエを構えています（写真１）。フランス画壇での活躍は 40 年を超えますが、一貫して「ヨーロッパの光と色」を探求され、ヨーロッパ各地の風景を洗練された光と優美な色彩で描き続けています。近年ではそれに人物を配することも多く、情感ゆたかで、私としては素人目ながら独自の画風を確立されたように思っています。フランスでは数々の賞を受賞していますが、日本での活動は 1979 年から故郷広島の福屋、天満屋をはじめ、東京の小田急、大阪の阪神など、大手デパートの画廊でほぼ毎年個展を開いてこられました（写真２）。

写真１　ヴェルサイユ宮殿と画伯ご夫妻

写真２　小田急の個展にて
（私と妻、画伯ご夫妻です）

渡部画伯との出会い

私は 1965 年に前記の皆実高校を卒業しました。同級生は仲がよく、とくに東京在住者は年に４～５回、私の妻も含め（同じ皆実高校出身）10 名前後集まって食事会を開いています。15 年くらい前、小田急での個展で来日された画伯ご夫妻が私たちの食事会に合流され、個展に誘われたことが出会いです。個展ではフランスを中心にヨーロッパ各地の風景が明るい色彩で描かれ、光と陰のコントラストがきわ立ちながらも柔らかく、感銘を受けました。ワインが大好きな私は、ブルゴーニュの秋のブドウ畑が描かれた一点に惹かれ、思わず「売約済み」の札を貼って貰うことになりました。画伯もワインがお好きで馬が合い、夫人が山口のご出身で親近感があったこと（私は山口大学出身）も手伝って、今に至る家族ぐるみのお付合いが始まったわけです。

表紙絵行脚

こうして、私は機会あるたびにヴェルサイユを訪れるようになりました。そのつど、古いけど荷物はたくさん積める……というオペルに乗って、画伯ご夫妻の案内でフランス国内外、作品の現地を尋ね、観光もワインも楽しみました。まさに表紙絵行脚ですが、ここで表紙絵を復習してみましょう。

１回目の **2010 年**は**「トゥルーヴィルのヨットハーバー」**：トゥルーヴィルはパリから約 200 キロ、ノル

写真３　トゥルーヴィル
（ヨットハーバー）

写真４　エクス・アン・プロヴァンス
（ミラボー通りのカフェ）

写真５　ヴェネチア
（スクオーラ・ディ・サンマルコ）

写真６　パリ（サントシャペル礼拝堂）

マンディー地方の風光明媚な海岸の町、ナポレオン三世時代から栄えるリゾート地です。隣町のドーヴィルは高級リゾートとして有名ですが、こちらは家族で気軽に海水浴、庶民的です。漁港もあって、水揚げした魚をその場で売る風景は生活感にあふれます。ヨットハーバーはこの漁港のそばにあり、船遊びを楽しむ人たちが集う場ですが、本作品は、そうしたリゾートでの楽しい雰囲気が柔らかい光の中で表現されています（写真３）。

2011 年　「プロヴァンスのカフェ」

プロヴァンス伯爵領の首都として中世から栄えてきたエクス・アン・プロヴァンス、現在では皆が憧れる南仏プロヴァンス地方の観光拠点です。目抜き通りのミラボー通りはプラタナスの並木、南仏のもっとも美しい通りの一つといわれます。おしゃれなカフェやレストランがあり、市民や旅行者の憩いの場となっています。本作品では、木々の間から降り注ぐ南仏の陽光を浴びながら、カフェでくつろぐ人たちが色と光で巧みに描かれています（写真４）。

2012 年「スクオーラ・ディ・サンマルコ」

水の都ヴェネチア、サンマルコといえば、サンマルコ広場のサンマルコ寺院を思い浮かべますが、ここはそこから少し離れています。観光客も少なく静かで、ヴェネチアに住む人たちの生活の匂いを感じます。スクオーラ・ディ・サンマルコは、壁面を大理石で装飾された建物でルネッサンス様式の傑作の一つです。当初は教会として建てられましたが、現在は病院として使われているようです。手前の運河は、由来は知りませんが「乞食たちの運河」と呼ばれています。本作品では、ヴェネチアの水と光、そして空気感が見事に描かれています（写真５）。

2013 年「サントシャペル礼拝堂」

パリのシテ島の最高裁判所の左側にある礼拝堂、小さいながら 13 世紀ゴシック建築の白眉です。「聖なる宝石箱」と称えられ、とくに 16 面の壁全体を飾るパリ最古のステンドグラスには一瞬息をのみます。まるで光の渦の中にいるようで、刻々と変化する光と色は私たちを別の世界に導きます……まさに画伯の世界です。今は観光客で大混雑ですが、画伯が初めて訪れたのは 42 年前とか、人影もなくただ一人修道女が礼拝していたそうです。ステンドグラスが織りなす光と暗い祭壇、佇む修道女……本作品は、その時の印象とスケッチが元になりました（写真６）。

2014 年「ラブイユ」

ラブイユは、セーヌ河のパリから 100 キロ下流に静かに佇む小さな村、ジャンヌ・ダルクの処刑やクロード・モネの祭壇画で有名なルーアンからさほど遠くないところです。都市化の波に乗らず、古い家並みも保存されており、セーヌの流れと相まって印象派画家の好んで描く風景が残っています。セーヌを渡る橋もなく、小型フェリーが車ごと無料で対

岸に運びます。渡し舟の感覚ですが、一方でセーヌは水運の大動脈、1万トンクラスの大型船が目の前を通っていきます。本作品は、その対岸から村を描いたもの、中心に建つゴシック建築の教会も見えています（写真7）。

2015年「王妃の庭のコンサート」

フェット・ドラ・ミュージックをご存知ですか……1982年に当時の文化大臣ジャック・ラングの「音楽はすべての人のもの」という提唱で始まった音楽の祭典です。夏至の日は、フランス各地の公園、広場、路上など至る所でライブ演奏、国中が音楽で溢れます。オーケストラから家族規模まで、誰もが参加できる夏の風物詩ですが、今や国際的なイベントとなり世界各地で行われています。本作品は、静かなヴェルサイユ宮殿の王妃の庭での小さいコンサートを描いたもの、家族でしょうか、友人同士でしょうか……初夏の爽やかな光の中、まるで音楽が聞こえてくるようです（写真8）。

2016年「リュクサンブール公園のカフェ」

パリには緑あふれる公園が多くありますが、リュクサンブール公園はパリでもっとも大きい公園の一つです。リュクサンブール宮殿を中心に広々とした公園内には、自由の女神の原像をはじめ100以上の彫像があります。学生街（カルチェラタン）やパリ大学、フランス議会上院にも近く、観光客だけでなくパリッ子にも親しまれ、画伯もよく訪れるそうです。カフェはこうした公園を楽しむ人たちの憩いの場ですが、本作品では、初夏の光の中、木陰のカフェでくつろぐ人たちが柔らかく描かれています（写真9）。

2017年「ヴェルサイユの花市」

ヴェルサイユはもちろん宮殿で有名な観光地ですが、庶民の生活に欠かせないのが早朝からの朝市です。新鮮な魚や肉、採りたての野菜、果物、茸、熟成したチーズなどの食材、もちろんワインもあって食いしん坊にはたまりません。そして市場を彩るのがこの花市、初夏の花はスズラン、ショウブ、ボタン、アジサイ、シャクナゲなど色とりどりです。本作品では、初夏の花市の明るく心弾む雰囲気が朝の光の中に描かれています。なお、フランスでは5月1日はスズランの日、家族や親しい人にスズランを贈って幸せを祈ります（写真10）。

2018年「若い楽士たち（モンサンミッシェルのテラスにて）」

モンサンミッシェルはフランス随一の観光地。フランス西海岸、サン・マロ湾に浮かぶ小島で島全体が修道院になっており、カトリック巡礼地の一つです。起源は8世紀ですが、この湾は干満の差が激しく、その昔は波にのまれた巡礼者も多かったといわれます。今では橋をわたって石門をくぐり、にぎやかな参道をすぎて坂を10分も登れば修道院です。僧院は966年に建立され、幾多の増改築を経て今に至ります。なかは広く見所も多いのですが、この楽

写真7　ラブイユ（セーヌの流れとともに）

写真8　ヴェルサイユ（宮殿の王妃の庭）

写真9　パリ（リュクサンブール公園）

写真10　ヴェルサイユ（花市）

写真11　モンサンミッシェル（楽士たち）

士たちの舞台は礼拝堂脇の小さい広場、ここでは音楽好きな人たちがいつも思いおもいに演奏しています。本作品には、そうした楽士たちが生きいきと、若々しいリズム感をもって描かれています（写真 11）。

2019 年、節目の 10 年目は**「医神アスクレピウス」**：題材はギリシャ神話ですが、画伯の想像力というのか、画力というのか……驚きました。アスクレピウスのアの字も知らなかったのにこれだけの絵がかけるのですから……。目次ページの画伯の解説をお読みいただき、ご興味ある方は、参考にした澤田祐介著『蘇る医神 アスクレピウスの物語』（医歯薬出版株式会社）のご一読をお奨めします。なお、アスクレピウスは祖父ゼウスに雷で撃ち殺されますが、神として天に上げられ星座（へびつかい座）となりました（写真 12）。このアスクレピウスの家系の 17 代目に「医聖 ヒポクラテス」が誕生します。

写真12　アスクレピウス
（東京女子医科大学弥生記念講堂の壁面のレリーフより）

シュヴァリエ・デュ・タストバン

話は変わってワインです。ブルゴーニュ地方は、ご承知の通りフランスワインの銘醸地。シュヴァリエ・デュ・タストバン（ブルゴーニュワインの騎士団）は、1934 年に創設された国際的なブルゴーニュのワイン・ソサィティーで、ブルゴーニュ地方のワインをはじめ、歴史、文化、郷土料理などを広く紹介する団体です。シュヴァリエは騎士、タストバンは利き酒用の平たい杯のことで、直訳すればワインの利き酒騎士団でしょうか。「ワインあれば憂いなし」がモットーで会員（騎士）は世界に約 12,000 名、本部はヴージョ村のぶどう畑の中にある「シャトー・デュ・クロ・ド・ヴージョ」（写真 13；起源は 12 世紀に遡るブルゴーニュワインの聖地、現存の建物は 16 世紀に再建されたもの）に置かれ、アメリカ、日本をはじめ世界中に約 70 の支部があります。日本支部は 1995 年に発足し会員 250 名、「会員間に友情を育み、ブルゴーニュワインを賛歌し、人生を楽しむ」が佐多保彦会長の掲げる基本精神です。私も日頃のブルゴーニュワイン好きが高じて推薦をいただき、2010 年 9 月クロ・ド・ヴージョでの叙任式に一家で出席し晴れてブルゴーニュワインの騎士となりました。この時も画伯ご夫妻に同道していただき、シャトーでの荘厳な叙任式とパーティー、楽しかったブルゴーニュ巡り、コート・ドール（黄金の丘）の珠玉のぶどう畑、素晴らしい思い出になっています（写真 14、15）。

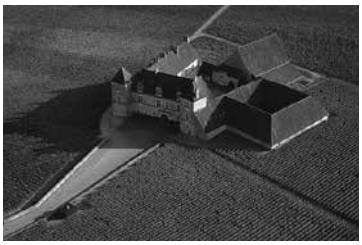

写真13　壮大なシャトー・デュ・クロ・ド・ヴージョ
（ブルゴーニュワインの聖地です）

写真14　叙任式にてタストバンをかけて
（私の一家三人と画伯ご夫妻）

写真15　ロマネ・コンティのぶどう畑
（ヴォーヌ・ロマネ村にあります）

以上、画伯とのお付き合いを振り返りながら、表紙絵をあらためて紹介してみました。画伯もまだまだお元気で制作意欲も旺盛です。この W'Waves の表紙絵、読者の皆様にお許しいただけるなら、もう少し画伯にお願いしよう……と思っています。どうか宜しくお願い申し上げます。